



第 21 号

2010年 8月15日発行

藤 沢 市 文 書 館
 〒251-0054 藤沢市朝日町12-6
 TEL 0466-24-0171 FAX 0466-24-0172

藤沢市文書館 検索

<http://www.city.fujisawa.kanagawa.jp/>

70年前の藤沢の歴史の中から―戦死者を弔う―



上の写真は、昭和 15(1940)年に六会の小学校で撮影されたものです。校舎の前に斎場が設けられ、戦死者の写真が3名分並んでいます。とてもつらい光景ですが、忘れてはならない光景でもあります。

この年は昭和 12 年 7 月に起きた盧溝橋事件から 3 年目、日本は中国との長い戦争の最中にありました。この間、日本軍は中国大陆に大軍を派遣し、国民政府の首都である南京や、武漢三鎮などを攻略しました。しかし、多くの死者を出して主要都市などを占領しても、所詮は「点と線」を確保しただけでした。(中村) (参考文献：藤原彰『昭和の歴史 5 日中全面戦争』小学館、1982 年)

戦死者を弔う 1
 刊行物 新刊のお知らせ 2

文学にあらわれた藤沢 第3回 3
 古文書の読み方 第21回 4

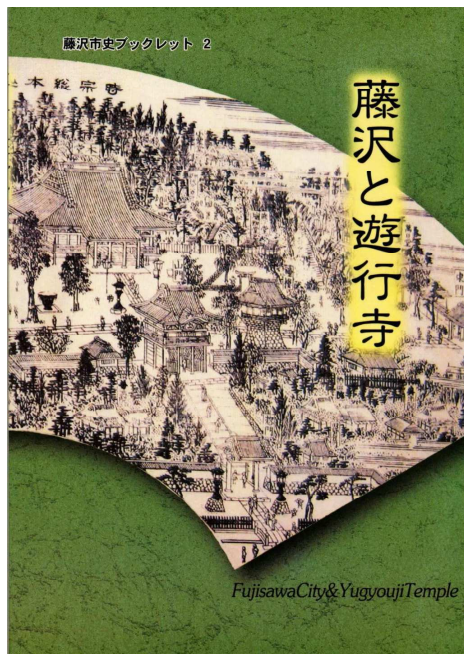
文書館刊行物 新刊のお知らせ

文書館では、昨年度末に新しい刊行物を発行いたしました。それらを紹介します。

市史ブックレット2「藤沢と遊行寺」(800円)

藤沢山無量光院清浄光寺(とうたくさんむりょうこういんしょうじょうこうじ:遊行寺の正式名称)は、時宗の祖・一遍上人の孫弟子である呑海(どんかい)上人によって、今から約 660 年前にこの藤沢の地に建てられました。以来、遊行寺の歴史は藤沢の歴史と密接に結びついてきました。

本書は、藤沢での遊行寺の歴史について、一遍と時宗教団のあゆみから始まり、中世から現代までの流れをテーマ形式で概説しています。また、寺内の寺宝や、年中行事などの紹介もあり、藤沢市にとって遊行寺とは何かを全 12 話にまとめています。



市史ブックレット2の表紙

『藤沢山日鑑』第28巻(4000円)

「藤沢山日鑑(とうたくさんにつかん)」は遊行寺の公用日記で、江戸時代より今日まで書き継がれています。本書は時宗研究の重要な史料であるとともに、宿場町・藤沢の様子を、江戸中期以降約 200 年間にわたりうかがい知ることのできる史料でもあります。

ります。

今回は、明治3(1870)年～明治7年の翻刻で、『藤沢山日鑑』としては最終巻になります。なお、高野修氏による解説「名号(みょうごう)と賦算(ふさん)」では、「南無阿弥陀仏」(名号)と記された札の配布(賦算)について、歴史的経緯などを記しています。

『藤沢市史研究』第43号(800円)

今回は論文が1本、文書目録が1本です。

下山治久氏による「戦国期の鵜沼の領主・岩本定次の軌跡」では、北条氏康の上級の側近家臣(奉者:本城主への取り次ぎ役)であった岩本について、残されている文書から紹介するものです。

また、同じ下山氏による「改訂 後北条氏発給者別 編年文書目録」は、同じ『藤沢市史研究』第21号(昭和63年)、同第27号(平成6年)の改訂版にあたります。今回は、新たに発見された後北条氏文書に加えて、『千葉県歴史』資料編刊行などで、後北条氏関連の新たな文書類が全国的規模で明らかになったこと、従来の目録類からは排除されていた寺社の棟札などを加えることなどにより、関係文書の数量が飛躍的に増加しました。また、これらの文書類によって『戦国遺文』(戦国大名の文書類を時代順で紹介したもの、東京堂出版から刊行中)に掲載された、後北条氏編の無年号文書の推定年代も相当に改訂されることになりました。

『藤沢市史料集』第34号(600円)

今回のタイトルは「ある兵士の軍隊日記(上)」。

藤沢市域出身の上等兵によって、昭和15(1940)年12月20日から翌16年7月18日にかけて、便箋綴を転用して記された日記の翻刻で、現在の中国南部・宝安からベトナム北部・バクニンに進駐した時の軍隊の実態が記されています。現地はこの当時平穏でしたが、軍隊内部では上級者の私的制裁が横行していました。そのような状況下で記されたこの日記には、軍隊内の兵士たち一人ひとりの動向や心の有り様が率直に記されているとともに、兵士の現地民への想いなども記されています。

文学にあらわれた藤沢 第3回

『潮風』(里見 弴(とん))

海の色がインキのやうに黒み亘って、碎けかゝる波がしらばかりが、まるで光を放つかと思はれるほど白かつた。江ノ島の輪郭は薄墨で描かれたやうに空へにじみ出してゐた。そこから大百足が匍ひ出したとも見える棧橋で、片瀬へとつながった浜には、豆でも撒いたやうに、白い運動着の学生がベースボールかなにかやつてゐる

上の文章は、白樺派の作家であった里見弴が、自分の体験をもとに大正 9(1920)年に雑誌『改造』に連載した小説『潮風』の一節です。

この作品は、小説家志望で積極的な文科の学生の川瀬と、スポーツマンで純情な経済学部 of 庄司を描いています。庄司は、遊泳部の助手として学習院の後輩の指導に來ています。川瀬は小説を書こうとしますが、思い通りになりません。『潮風』は、このような二人の恋愛に対し対照的な会話を通して、当時の若者たちが悩んでいる問題を提起しています。

高三(たかみ)啓輔氏によれば、里見は友人の中村貫之(かんし、後の男爵・貴族院議員)とともに、明治 42(1909)年 7 月 23 日から 31 日にかけて、鵠沼

の旅館「東屋」に滞在しており、宿泊した部屋も特定されていますが、この作品はその時の体験をもとにしたといわれています。さらに、別の箇所では

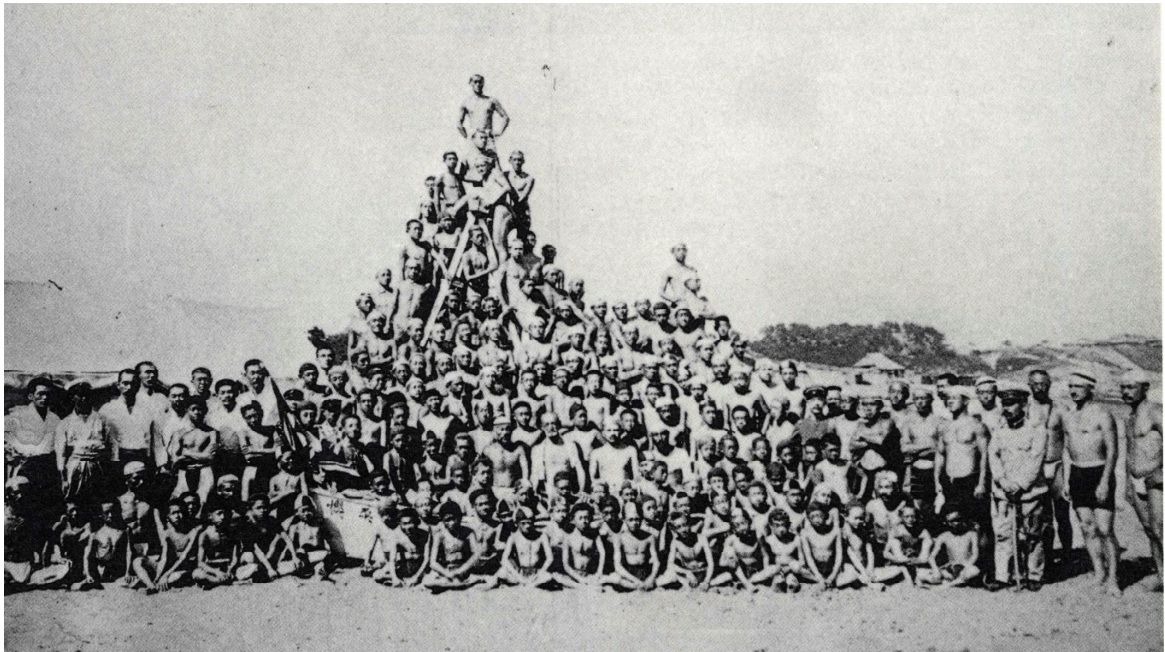
やがて、彼等は、片瀬川の渡しを渡って、学習院の遊泳場についた。(中略)葦簣張(よしずばり)のなかで、裸になって出てくると、隣の、教官の脱衣所に、前の日までは来てゐなかつた乃木大將がゐた。

と、当時行われていた学習院の水泳練習の様子も描かれています。

学習院では、明治 24(1891)年から片瀬で水泳練習を実施していましたが、片瀬が海水浴場として、発展するようになったのは、乃木の役割が少なくなかつたと思われます。

冒頭に掲げた湘南海岸の風景の中で繰り広げられる、白樺派の青年たちの青春群像を浮き彫りにした作品と言っていいでしょう。

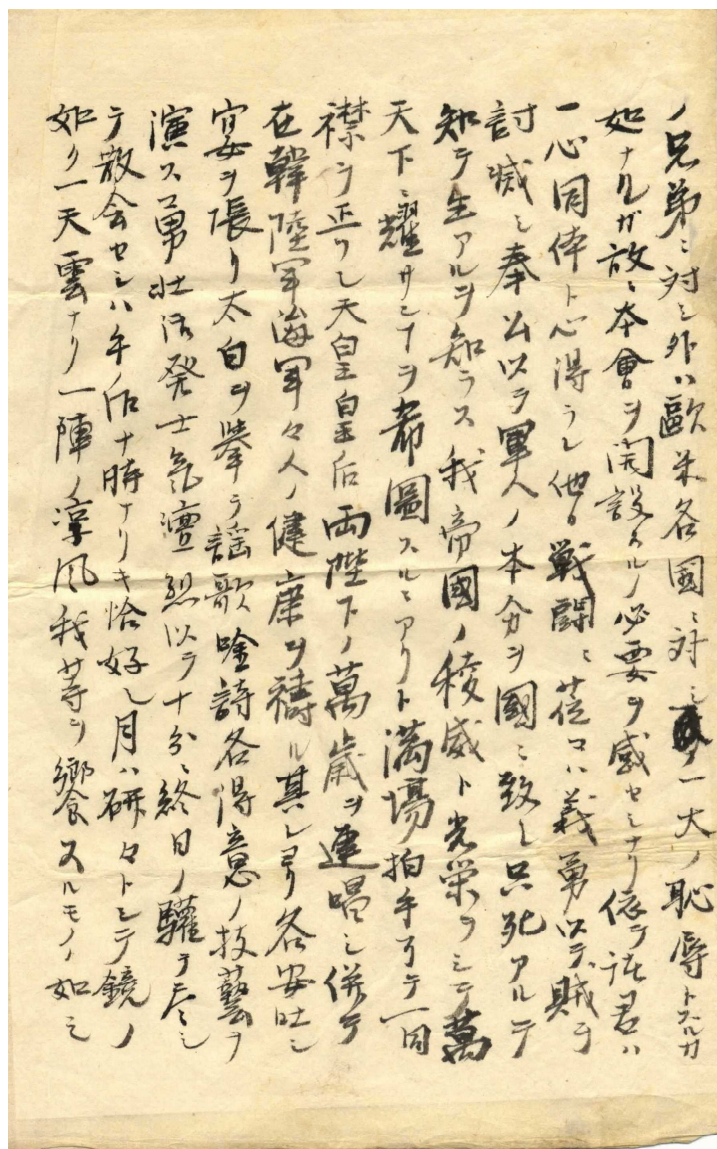
この作品は『筑摩現代文学大系 22』『現代日本文学大系 37』(いずれも筑摩書房、1980 年)に収められ、市内図書館で読むことができます。(伊井)
(参考：高三啓輔『鵠沼・東屋旅館物語』博文館新社、1997 年)



片瀬海岸での乃木将軍と学習院の生徒たち(明治40年代頃)

連載 古文書の読み方 第21回

—「明治村予後備軍人ノ一大決心」(続き)—



【資料について】 左の写真は、日清戦争末期に台湾の西方にある澎湖諸島の占領作戦に関わった、明治村出身の陸軍兵士・竹内要作にまつわる資料「明治村予後備役軍人ノ一大決心」の2頁目の文章です。

【時代背景と資料の内容】 明治10年代後半から20年代にかけて行われた日本の軍備拡張と明治19(1886)年の師団司令部条例によって、近衛を含む7師団24聯隊の師団編成が成り、現在の藤沢市域に属することになった市町村は、第1軍管東京鎮台に発する第1師団管轄下に置かれました。その後、明治29年3月から、それまでの大隊区司令部に代わり聯隊区司令部が各師団毎に設置され、神奈川県は第1師団下にあり、藤沢周辺部は横浜聯隊区に所属しました。

この資料には、日清戦争開戦後の8月15日(ちなみに宣戦布告日は公式記録上では8月1日)に藤沢大坂町の軍用旅舎(旅館)「国分楼」で開催された、明治村の予後備役軍人たち(予備役・後備役については、『文庫』第19号をご参照ください)による会合の様子が記されています。

日清戦争は、近代日本が体験した初の本格的な対外戦争であったため、兵士たちも非常に意識を高揚させている様子がうかがえます。兵士たちがさまざまな技芸を出し合ったこの懇親会は夜の10時まで続いたと、この資料には記されています。

(参考文献：藤沢市史編さん委員会編『藤沢市史』第6巻通史編、藤沢市役所、1977年)

【問題】 ここで、予後備役の兵士たちは宴会に入る前に、2つのことを行っています。1つは「在韓陸軍海軍々人ノ健康ヲ禱ル」でした。さて、もう1つのこととは、いったい何だったのでしょうか？

編集後記

毎年8月ともなると、戦争についての特集企画がテレビなどで持たれます。日本がポツダム宣言を受諾したことを国民に伝えた「玉音放送」が、8月15日という「お盆の中日」に行われたからでしょうか、その前後は戦争の話題が取り上げられますが、9月2日の降伏文書調印については忘れられがちです。

今回取り上げた刊行物案内で戦争関連といえば、史料集「ある兵士の軍隊日記(上)」になります。ごく普通の人間が兵士となって、外地進駐部隊に所属した時に何を見たか。この当時のベトナム北部では戦闘が身近ではありませんでしたが、逆に日本軍の実態の一部が日記から見えてきます。多くの方々にご高覧を賜れば幸甚です。(中村)